□随　想□

私の中の神戸

島尾敏雄
え・小松益喜

神戸は私の育ったところ。とにかく、大正の終りのころから昭和二十七年まで、私の家は神戸にあった。そのあともしばらくは父は神戸に住んでいた。だから神戸のことならなんでも知っているつもりでいた。町のことだけでなく裏山のどんな山も坂も谷も池も川も私にこの世の中を教えた材料でないものはない。

しかし私の本籍は神戸ではなく、もう十年ほども神戸をたずねず、今は身をよせる身うちの家もないせいか、ここは自分の育ったかけがえのないところと思っても、さてその思いをどこに掛けてよいやらわからない。私の知っている神戸はすっかり様子が変ってしまって、声をかけても振向いてはくれないにちがいない。それで私は神戸を忘れてしまおうと思った。もともと私は故郷喪失者なのだから、ためらわずにここが自分の故郷だと言えるところはひとつもない。本籍地も生まれたところも現在住んでいるところも、私をそこの土着のにんげんとして受けいれてはくれない。どこの方言をも土着のひとのようには話すことができずいつもよそ者としてくらしてきた。それは神戸でも変りがなかった。自分ではすっかり神戸弁をしゃべっているつもりなのに、ときどき級友から、異質な要素を指摘されたものだ。長い歳月のあいだ生活とからみ合って幾度となく耕された末にこしらえあげられた方言、そのひとつの、あの

こわばった緊張感の少ない関西弁を、私は自分の舌とすることはできなかった。私の過去の経験がいつもよそ者として圏外の場所に自分の居場所を見つけることを覚えさせた。だから神戸も、私が通りすぎた横浜や長崎や福岡、そして東京とおなじように、しばらくはそこでくらし通りすぎてきた土地として、履歴書の中に書きこまれ、やがて記憶は枯れてしまうと思えた。時おりの神戸からの音信も影絵のように手のとどかぬ遠く過ぎてしまったところからのものとして自分に納得させようとした。

しかし神戸は不死鳥のように、忘却の灰の中から、いきなりなまなましい記憶となってよみがえる。そこは私が小学校を終え、中等学校の修学課程をおさめたところ、いわば、その港と山と傾斜の町が都市に対するひとつの原型を私に与えてくれたと同じように、にんげんのタイプを私にさし示してくれたところであることに気がついた。それは過去に住んだことのあるどの土地ででも、起こり得ることではあるけれども、幼い最初の集団生活の体験である神戸の小学校や中等学校のときの級友たちは、無地の素肌に焼きつけられた刻印のように、そのほりあとはとれ去るものではないそのころのことなど、とうのむかしに忘れ去ってしまったと思っていたのに、実のところ意識の深いところで、ひとを見るときの基準にしていたことに、ついこのごろになって、はっきり気づくことができた。私は横浜の小学校から二年生のとき当時はまだ西灘村と言われていた稗田の西灘第二尋常小学校に移り、六年生のとき市の中心部の神戸尋常小学校に転校してそこを卒業し、そのあと「県商」でとおっていた神戸商業にはいった。神戸小学校にはただの一年かよっただけだが、そのときの同級生で組織された「昭五会」とよぶ同窓会が、卒業してすでに三十五年にもなろうというのに、その会合が未だにくずれずに続いている。最近またその会員名簿が送られて来て、消息が分っている三十四名のうち二十二名まで今もなお神戸に住んでいるのを見ていたら、言いようのない懐旧の思いに襲撃された。戦死、病死した十二人をあわせて全員五十一人の名前の書かれた名簿を見ていると、親しかった者もそうでなかった者もほとんどすべての名前がはっきり記憶にのこっていて、一人についての想起は次々に反応し合い、意外に個性的な性格として全員が自分の感受の中に刻みつけられていることにおどろいた。およそつきあうことのなかった級友でも、彼の存在は私の意識の下に眠り、折にふれ突如としてうかび上って、私の新規の人間理解にインチメイトなサインを送ってくれていたのだった。私には遂にそのときの級友の数だけの個性のタイプしか理解できないのではないかと思えるほどだ。

やがてどうしても、にんげんの現世での経験というようなことを私は考えないわけには行かないそれはやはり、底知れぬ死の恐れにつながるものであった。けしつぶほどの私の生であるにしろ、通りすぎたところも、かけがえはない。ことに幼少の日を送った神戸を回想すると、日々の緊張から心はときほぐされ、つい軽い言葉が（へたな神戸弁ではあるが）口をついて出てくるのを覚えないわけには行かぬ。

（作　家）

連載随想 第二十二回

終年林下の人

白川渥
え・中西勝

久しぶりに、青葉時の山陰をうろついて帰ったとかく雨の多い土地柄だが、今度は旅行中ずっと快晴に恵まれて、ゴルフ灼けした顔が又一段と黒くなった。

鳥取は、私の人生の振り出しの土地である。青年の頃、そこの師範学校に五年ばかり勤めたことがある。その頃の教え子がもうぼつぼつ校長などをやっている。その連中から呼び出しを喰って出かけたわけだが、もう一つ、私自身のひそかな所用もあった。

私の戦前の作に「柊の庭」「北の町」「夜の道」などの一連の山陰ものがある。

いずれも、当時下宿していたM家を舞台にして綴ったもので、私としてはいまも愛着のある作品である。

M家は、旧藩時代の御書院役の家柄で、そのだだっぴろい士族屋敷に、M夫人と八十幾才の姑が二人だけで、ひっそりと暮していた。主人は数年前に他界し、一人娘のS子は隣家の農学士に嫁いで、その勤先の京城に行っていたので、私はいわば留守番役の恰好であった。M夫人は、当時東京で今東光氏らと同人雑誌をやっていた詩人の赤松月船氏と旧知の間柄で、その月船氏の紹介で厄介になることになったのだ。

M家に同居中、私は夫人と姑からかりそめならぬ庇護を受けた。わがまま放題の下宿人であった今度会った教え子の校長連中もしょっちゅうM家に出入りして、まるで私の家のように食い散らしていたものである。彼らと私は、年齢があまり違わなかったので、時にはこっそり酒瓶を持ち込んで放歌高吟、監督役の夫人をハラハラさせたこともある。時代はすでに満州事変に突入していた。川一つ距てた向いの土堤道には、朝夕、鳥取連隊の演習部隊が往来していた。

そんな軍国の靴音高い町であり、時代であったがこのM家で過した青春の日日は、私にとっては、わが生涯の最良の季節だったと言えるかもしれない。

高齢の姑は、御殿女中のようなだらりの帯。私の母と同年の夫人も、翠翠のピンを一つ挿した古風な廂髪。裏庭の少し荒廃した土蔵の軒には、一抱えほどの熊蜂の巣がぶら下がって、時折そこから翔んでくるやつが、二階の私の書斉の障子窓にかすかな翅音をたてる。

それまで東京にいて、私の頭に立ちこめていた都会の騒音は、その閑かな翅音で、一瞬に払われたようであった。何やら時代を一つ超えた向う側の世界に踏み込んだ心地であった。

M家では、その夫人も姑も今は他界している。戦争中、この地方を襲った大地震のために、屋敷の中には、古ぼけた土蔵と離れの一部が残っているだけだ。その離れに、朝鮮から引き揚げて来た娘夫婦が住んでいる。

戦後、夫人はその狭い離れで長く中気を患ってから他界した。秀でた眉、凛とした彫りの深い顔立ちだったが、私が見舞に出向いた時には、この屋敷も病人の顔も、衰残見るにたえない打ち変りようであった。

姑と夫人の墓地は、郊外の浜坂砂丘に近い共同墓所にある。鳥取に着くなり、私は先ず車をそこに走らせて、夫人の好きだった卯の花を献じた。昔々、ちょうど今頃、M家の裏庭に咲き乱れていた花である。

白花閑（びゃっかしずかなり）

そんな色紙の落書きを、夫人の部屋に献じたこともある。M夫人の人品風情と生活のたたずまいを、この句に托したつもりだったが。……

私は、死後の霊などは信じない。死は暗黒でもなく、彼岸でもない。深刻な意味附けなどは無用である。

ただ有機体が無機物に帰するだけの話として、淡々と受け取る方が好きである。が、この日、私は地下の夫人と永く対話した。言いようもない感傷が、人影もない墓地の一角で、私を永く停徊させた。

旅に出る二、三日前である。私たち数人の友人が、今度須磨駅前に出来た「須磨城」のあるじ梶氏に招かれて、一夕お茶を頂戴したことがある。その時、あの白堊の櫓の中の襖に、翠香女史揮毫するところの美事な散らし書きがあった。

終年林下人

夫人の墓前で、ふとこの言葉が甦ったのだった人間、その晩年において「林下の人」の閑かな境涯を得られるなら、最上の人生と言えるであろうが、M夫人の場合はあべこべであった。「中年林下人」だっただけに、あまりにも無残だったその終年が、無念なのである。

（作家）

連載随想 第十回

カラン・コロン

―あるのろけ話―

阪本 勝
え・小松益喜

東大三年生の夏やすみに、わたしは、岐阜県山県郡三輪の後藤という家を訪れた。後藤家とわたしとの関係はつぎのとおりである。

わたしの父、阪本準平は、明治元年生まれで、尼崎の阪本家のひとりむすこだった。母は大阪天満の、豊田という酒造りの家のひとりむすめだった。このふたりが結婚したから、豊田家のあととりがなくなった。そこで最初に生まれた女の子、つまり私の姉を豊田家の養女とした。婚期がきたころ、姉は養子を迎えることになった。

わたしの父は、大阪の儒者、藤沢南岳の弟子だった。南岳翁は、作家、藤沢桓夫の祖父にあたる方である。その因縁で、岐阜の旧家で、同じく藤沢門下の後藤家に白羽の矢がたったものらしい。そこで後藤家の数多い兄弟のなかの末弟が、わたしの姉の養子に迎えられて、豊田家をつぐことになった。そういうつながりで親戚となった後藤家を、大学三年の夏やすみにわたしは訪れたのである。

後藤家は、長良川の上流に沿うある村の地主で南岳翁の門弟をもって任じる旧家だった。ひろい屋敷のなかには、柿や栗の木などがあって、裏には清らかな小川が流れ、深い竹藪が緑を濃くたたえていた。川にゆくと、鮎がふんだんにとれ、春はタケノコ、秋はマツタケ、都そだちのわたしなどには、夢幻郷のように思われた。

そんな屋敷の離れ座敷に、二十四歳の大学生が泊ったのである。サカナとりで疲れた体を静まり

かえった離れで休めていると、さあ、何時ごろだったか、庭の敷石を踏む駒下駄の音がきこえてきた。

カラン・コロン、カラン・コロン……

それはわが泊り部屋に近ずいてくる。やがて静かにくぐり戸が開いた。そしてひとりのむすめが現われた。

わたしが眠っていると思ったらしく、むすめは枕もとに、そっと水びんとコップをおいた。わたしはタヌキ寝をしてだまっていたが、かすかに目をあけて、むすめの顔を盗み見た。

どこの子やろ、と思った。あとからわかったことだが、この子は、夏休みのこととて、親戚に行っていて、きょう帰ってきたばかりだから、わたしはその顔を知らなかった。この子は後藤家の長女だったのである。

むすめは、くぐり戸を閉めて、おもやの方に帰っていった。カラン・コロンと音をのこして。

このカラン・コロンがわたしの運命を決した。もともとロマンティックな性情がわたしの心に動きだし、カラン・コロンのぬしが忘れられぬようになった。ある夕方、川原に出て、とれた鮎を石焼きにしてたべた。むすめはサカナの肉と骨をはがして、たべさせてくれた。塩味がうまかった。

これから焼かれようとするとれたての鮎が、ピョンピョン砂の上を跳ねるのを見て、むすめは絶え絶えに言った。

「可哀そうに……」

そのためいきが、妙に印象に残った。

むすめの名は、那緒と言った。二十四歳の大学生は、そのむすめを思うようになった。青春の耳に、カラン・コロンがいつもきこえた。東京にはいろいろの女がいた。東大赤門前のY・M・C・Aには、新時代のピチピチした女性が色とりどりに出入りした。そのなかに、少女時代の岡田嘉子もいて、学生たちの心をそそった。嘉子にもひかれたが、わたしは、なぜかしらカラン・コロンの田園楽を忘れることができなかつた。

卒業後、結婚ばなしが出たころ、わたしは、両親に、妻をもらうなら、岐阜のあの子がほしいと言った。父は首をかしげた。「あんないなかっぺえもらわんでもええやないか。もっとええむすめは、なんぼでもあるのに」と思ったらしい。後年父がしんみり言ったことがある。「まさるは、もっと目の高いやつやと思っとったのに」と。

しかし縁というものはふしぎなもので、いや、くせもので、わたしは、いろいろの縁談をふりすてて、カラン・コロンと結婚した。あわれなるかな、お那緒さん、いまや六十のオバハンと相成られた。従順で、やさしい妻の半生だった。庭を歩くときは、駒下駄をはけとわたしが言うと、ハイと言って駒下駄をはき、カラン・コロンのしらべをかなでてござる。カラン・コロンの由来を本人はご存じない。わたしがおりにふれ言うことに、「一日でも、一時間でもいい、オレに早く死なしておくれ。おまはんがさきに行くんじゃないぞ」

妻は涙ぐむ。初夏のこのゆうべ、あれ庭先にきこゆるは、カラン・コロンの老妻のしらべ。

妻よ。長生きしておくれ。オレが死んだら、カラン・コロンをテープにとって、墓石のそばでかなでておくれ。ああ、カラン・コロン、カラン・コロン……

（随筆家）

創業明治四年

味噌漬・佃煮

大井の神戸肉

＊

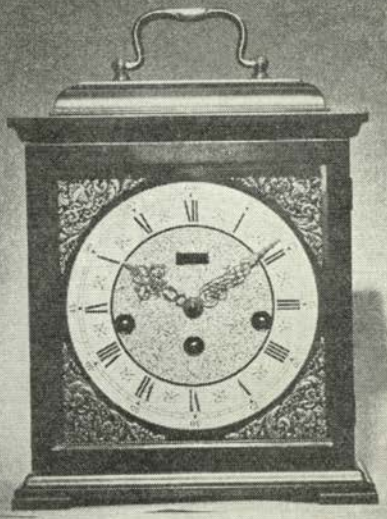
KOBE BEEF

大井肉店

本　店　神戸市生田区元町7電④1046・4780

直売所　阪神百貨店・大阪三越・三宮そごう・神戸三越
伊丹日本航空・塚本ライフ・豊中ライフ・伊丹エース

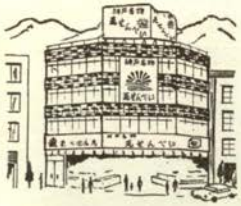
Kienzle
Made in Germany



特約店

美田時計店

元町通3丁目　TEL③1798



新菊水総本店ビル

地上４階・地下１階
昭和39年12月完成予定
（現在地ヨリ 100米南）

創業明治元年

菊水総本店

神戸楠公神社前④1310・1382・9874

O-SHIBATA

㊟ 柴田音吉洋服店

神戸・元町通４丁目　神 戸 4－0693
大阪・高麗橋２丁目　大阪 231－2106

◇神戸っ子放談◇

瀬戸内沿岸の開発と結びつける

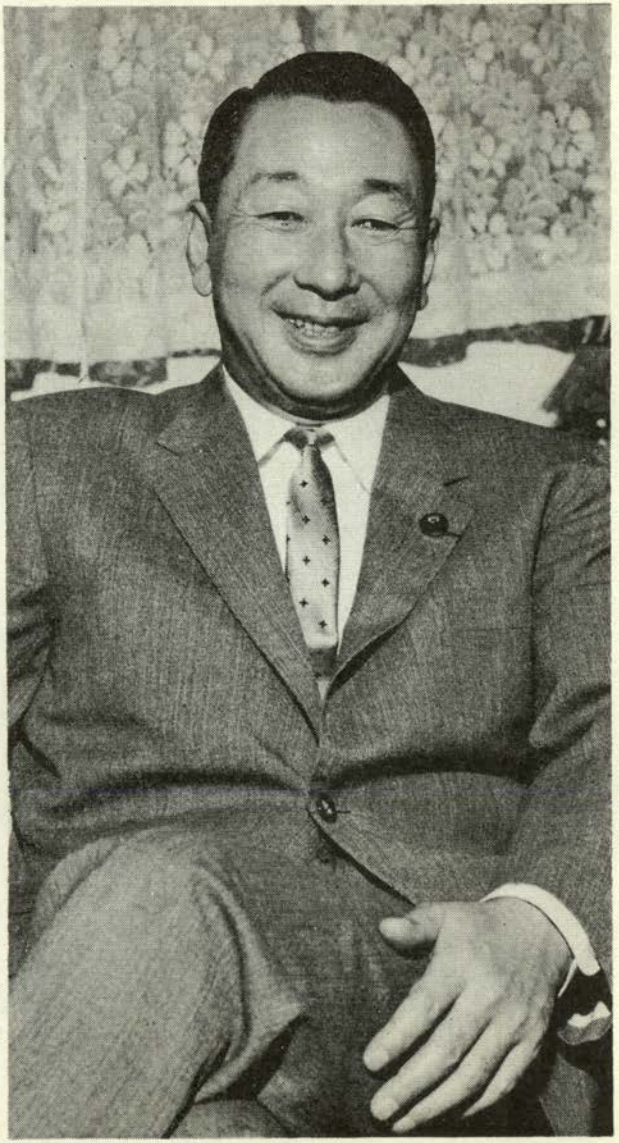
神戸を商業都市に！

砂田重民　衆議院議員

「これでも大学時代はアイス・ホッケーのセンターフォードをやっていて、立教チームの黄金時代を築いたものなんですよ」こう言われる砂田重民代議士は、なるほど政治家というよりもスポーツマンらしい実業家タイプ。しかし、話が政治のことになると俄然熱がはいって来る。

諏訪山小学校に通った頃

「下山手六丁目の市電の停留所あたりに、YMCAがあって、そこを山手に上ったところで生れましてネ。親爺が神戸で弁護士を閉業していたものだから——父君砂田重政氏は大正8年から昭和10年まで17年間、神戸を



選挙区として6回当選されている――だから出身は諏訪山小学校なんですよ。中学からは東京に連れて行かれて、暁星中学校にはいった訳ですが、親爺は政治家だったから子供の教育は放任主義でした。もっとも親爺の気持としても『子供は政治家にさせたくない』と思う気持があったのだろうと思いますネ」

選挙は生れ故郷の神戸で

――どんなことから政界にはいられたのでしょう――

「それにはこんな話があるんですよ。現在の河野一郎建設大臣と父の重政とは随分ながい交際でね。河野建設相がまだ朝日新聞の記者をされていたころから、父とは親しかったので、私も子供のときから河野さんを知っていましてね。そして、父の重政のすすめで河野さんは政界入りをした訳です。私がたまたま上京した時、親爺の使いで河野さんを議員会館に訪ねたところ、河野さんは私の顔を見ていきなり『私の秘書官をやれ』と言うんですよ。『私は冗談じゃあない、会社もやっているのだし、迷惑だ』と断って神戸に帰って来たところ、何んと翌朝の新聞にはもう、秘書官になったと書いているんで、吃驚りしましたよ。あれが河野流というのでしょうね。早速、親爺に訳を話して河野さんに話してもらったんだけど『河野さんがきかないよ』と言うし、あまり興味もないままに「農林大臣秘書官」になり、勉強しているうちに、中曽根代議士など自民党の若手グループが懸命に頑張っているものだから、日本の政治がなんとかならないものかと言う気持になって新しい時代の仲間にはいろうと言う積極的な考え方をもつようになり、政界入りをした訳ですよ。特に昭和32年河野経済企画庁長官の秘書官を勤め勉強して行くうちに気持も決ったし、ちょうどその年に父が亡くなり一層厳しく考えるようになりましてね。昭和33年、昭和35年の総選挙と2回落選しましたが、選挙区は自分の生れ故郷でやりたいと決めていたものですから、神戸という難かしい道で頑張ったんです。7年かかりましたが、自分としては、いい勉強が出来たと思っています。それに父の選挙区（愛媛2区）を継ぐと言うことに抵抗があったし、選挙というものはそんな遺産を継ぐべきでないといまも思っています。

――砂田重政氏は戦後は出身地の愛媛県今治市（愛媛2区）から立候補して政界にカムバック、昭和30年鳩山内閣の防衛庁長官、自民党総務会長などに就き、愛媛には強力な地盤があった。昭和32年12月没――

代議士という仕事――

――兵庫一区の自民党代議士とこの仕事なり、これからをどう進められるかということを伺いたいのですが――

「昨年の11月から本格的な仕事にはいって、驚ろいたことは、神戸市の都市としての間口の広さと奥行の深さですよ。神戸市の町づくりから企業の金融、衛生施設にいたるまで市民生活に直結している問題が山積されていて、その仕事の忙がしいことといったら物凄いですね。国会委員会、政務調査会での仕事、それぞれの部会と重なりあってスケジュールがビッシリ詰ってしまう。例えば、港湾関係の委員会、生糸関係の会合、近畿圏整備法の問題など私の仕事に関係のある会合が同じ日の同時刻に開かれる時があったりするんですよ。これは、どうにも仕様がない、物理的に無理でしょう。そうなれば、出席出来ない部会には、前もって私の意見を出席者に主張してもらうようにする手配をしなければならないしね。またそれぞれ関係のある部分はすべて、神戸と直接結びついた問題ばかり、例えば、近畿圏整備法で大都市には過密地帯を設けて、工場の新設を許可しないで都市の過密化を防ぐようにしなければならないと言う問題が提起されれば、神戸の場合、その過密地帯は何処になるか、特例の許可の裁決をするのは、県か市か。こんな重大な法案は神戸の将来にも大きく影響することが多分にある訳ですよ。こんな場合は絶対に休めないし、随分神経を使いますよ。早速、次は、海運関係の問題とそれこそ、ひっき

りなし。くたびれますよ……ところが〝くたびれた〟といっても誰れも本気にして呉れないんだ、このとおりゴルフをやめてから逆に肥えてしまったものですから、みんな元気そうだと言うんですよ」（笑）

県政、市政と国政を結ぶかけ橋

「代議士生活で一番感銘の深かったのは、私が神戸で当選してすぐに39年度予算の編成でしてね。県政市政と国政とを結びつける時だと、町づくり、道路建設、住宅建設の予算の確保、県立医大の国立への移官問題などに奔走して殆んど99％は成功しましてね。市長、知事も喜ばれましてね。これは一番嬉しかったし働いた甲斐がありましたよ。だから、大晦日に神戸に帰って来ましたがいい春を迎えられましてね。生涯のなかでも深い印象となって残るだろうと思ってます」

これからの神戸・その考え方

「これは神戸だけの問題ではなくて、国の経済全般にわたることですがいま神戸を含めて六大都市の道路開発が遅れていることが一番大きな問題になっていますし、物価なども六大都市がいちばん高いようです。

ところが、依然として人口は六大都市とその周辺都市に集中して来る。この人口の集中には全くどの都市も頭を抱かえている訳ですよ。勿論神戸も同じように悩み、問題をかかえているんですが、幸い神戸は地形的に比較的、南北、縦の側に開発する場所がありますから、六大都市の中では、神戸が一番住宅地を確保しやすい地形をもっているということは出来ますよ。

神戸の重要産業といわれる造船、海運、鉄鋼などの体質改善などは確かに必要な問題だけれど、神戸の場合、生産都市としてのこれからの開発は到底無理だと思いますよ。工場の誘致をするにも土地が少ないし、難かしいと言えますね。それに市民生活の環境を悪化させないようにも考えなければなりませんから、神戸としてはむしろ、神戸港を利用して、商業都市として一層の繁栄を計ると言う方向にもって行った方が理想的だと思いますね。

まったく、神戸だけで独自の開発を考えるといっても神戸自体ではどうしようもない、そこに瀬戸内経済圏の問題も生れて来るし、明石架橋の問題も生れて来る訳ですよ。いづれにしても瀬戸内沿岸はこれからの開発に脚光を浴びて来ることは間違いないし、元来、生産力の豊富さをもっていながら交通が不便なため開発が遅れていると見ていいのだと思いますよ。

これからの瀬戸内圏は、天然の条件に恵まれて、一大生産地帯になると思いますし、これくらいの規模の開発をやらないことには、国際的な競争にも参加出来なくなるのではないかと考えているんですよ。

こうなると、神戸は港都としての重要さがますます加えられて来る。神戸港をより生かすことになる。四国を架橋で結べば瀬戸内沿岸で生産されたものが神戸に集中されて来る、そこに商業都市としての限りない可能性が生れてくるでしょう。いわば工業地帯は四国、瀬戸内沿岸に廻わして、これらの地域で生産された物質をはかせる力を神戸がもつようになる訳です。また、そのようにもって行ってこそ神戸の将来がひらけると思いますね」

趣味は万能選手

「私のスポーツ好きは学生時代からで、万能選手ですよ。立教大学の学部で2年の時、アイス・ホッケー部で立教の黄金時代を築いたものですよ。その頃の日本のカップを全部さらったことがあるんです。

勿論、いまはもう駄目ですよ。いつか、OBで試合に出場したのはいいけど、2分程も走ったら目が廻っちまったよ（笑）いまは忙がしくて行けないけれどゴルフも好きですよ。楽しいものは何んでも好きで、長唄でも日本舞踊でも洋楽でも、何んでも楽しむ方でね。子供がネお父さんは何んでも好きだなァと呆れていますョ」

（文責　小泉康夫）

経済ポケット ジャーナル

ミコヤン副首相の来神で五月晴れ

国会の招待で来日したソ連最高会議議員団のうちミコヤン第一副首相を団長とするA班二十三人が五月十九日、神戸製鋼所を訪問、ミコヤン副首相は灘浜工場を見学、労働者と握手したりして、益んに「赤い国のセールスマン」ぶりをみせていた。浅田会長は一昨年、経済使節団の一員として訪ソしておりミコヤン氏とは旧知の間柄。来社したミコヤン氏に「きょうは天気予報では雨の予定だったが、あなたが来社したためミコヤン天気(快晴)になった。空から見たシベリアは無限の大森林で、自燃の大宝庫。この資源と日本の労働力、技術を結びつけ、大いに取り引きを増大しよう」とあいさつ。これを受けたミコヤン副首相も「浅田さんはエバーグリーンで、肉体的にも若いし、考えも若く感心だ。お互いの取り引きも政治的な関係とは別に流れるようにやりたい。ソ連はこれまで特許の売買はやらなかったが、これは大きな間違いだった。これからは大いに日本の技術を買いたい。日本の技術は米国から導入したものだが、非常にすばらしい。よい生徒が先生を追いこすのはいいことだ」とあざやかに答え昼食会でも、お互いの家族のことも話し合ってなごやかな雰囲気。対ソ輸出に百八億円の実績のある神戸製鋼のこと、ミコヤン氏に気に入られてますます対ソ輸出が飛躍しそうだ。

またソ連議員団B班(団長セルジュク氏)も二十二日、川崎車輛を訪問、東海道新幹線用電車を見物し、上田社長らと歓談した。

ミコヤンと握手する浅田会長・手前外島社長

体質改善と基盤強化を図る神戸の大企業

新三菱重工業、三菱日本重工、三井造船の旧三菱系三社は六月一日から合併して三菱重工業として発足するが、新三菱神戸造船所はその準備のため五月一日から高砂製作所を分離、独立させた。神戸製鋼所も機構改革と大幅な人事異動を発表、これまでも経営委員会を経営計画委員会(委員長岩武照彦常務)として再発足させた。同委員会は専務会の補佐機関で、長期経営計画を練ろうというもの。このように神戸地区では大企業は開放体制下での体質改善、基盤強化を図り、対外競争力を強めようとしているが、中小企業は金融引き締め下でもありまだ当分は苦難の道が続きそうな気配。

訪米造船業界代表に川崎重工砂野社長

三月二十日から四月十八日までサンフランシスコ、シカゴ、デトロイト、ワシントン、ニューヨークなど主要十三都市を訪問した訪米経済使節団は特定な目的は持っていなかったが、米国財界人の日本経済への認識を深めさせたことで大きな役割りを果したようだ。造船業界代表として使節団に参加した川崎重工業社長砂野仁氏も「事前の準備がよかったせいもあり、効果が大きかった。金利平衡税問題など政府と民間の意見が必ずしも同じではないようだ。日本経済への評価は非常に高い。印象的だったのは米国の会社は社是が確立していて、対社内、対社外の人間関係がスムーズにいっていることだ。それに当然ながら中共問題に対する関心は高く、日中の接近はいやがっている。造船技術ではなにも得るところはなかったね」と感想を語っている。

＊KOBEオフィスレディ＊

薬師敬子さん(22才)ニッポン・ステイツ・マリン・エージェンシー総務課勤務 神戸市役所に近いこの船会社には、須磨高校を出てからのお勤め。「水泳が好き、デイトも趣味ヨ」と笑うエクボが魅力的だった。

北欧の銘菓

幣社の登録商標

□ピラミッドケーキ
□バウムクウヘン
□クッキー
□ムンデット
□シモン

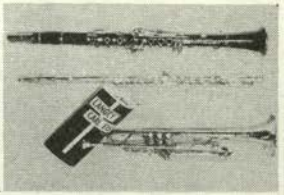
ユーハイム
コンフェクト

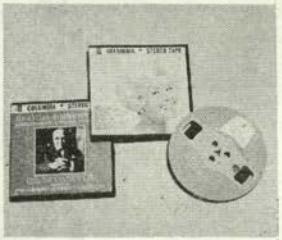
本社・工場　神戸熊内町1（市立美術館東隣）
熊内店　TEL. 22－2336・1164・1165
三宮店　神戸三宮生田筋（階上喫茶室）
TEL. 3－7343・0156・4314

KOBEヤマハニュース

◆ **輸入管楽器のご紹介**

ヤマハがエージェントとなって、米国を初め欧州各国の著名なメーカーのクランポン、セルマーベッソン、マーチンetc
優秀な楽器の数かずを整え音楽ファンの人気を呼んでいます。
今月はそのなかの管楽器をご紹介いたします。
クランポン社(仏)クラリネット　¥70,000
S.M.L.(仏)フルート　¥125,000
ホルトン社(米)トランペット　¥75,000





◆ **フォー・トラック・ステレオテープの発売**

レコードになる前の音楽をダビングした直輸入テープ（フォートラック）が、クラッシク、ジャズ等広範囲にわたって神戸では日本楽器のみで発売されています。今度価格改制で従来3900円のものが、2700円になりました。

◆ **輸入レコード新入荷**

日本で未発売の直輸入レコードを、日本楽器では多数、在庫しています。
グッド・タイム、デッカ、サースランド、ホークウェイ、ブルーノートなど各社の直輸入盤は、レコードファンの最高のおくりもの。
ぜひ、ご来店ください。
写真は新入荷のレコード

神戸もとまち
日本楽器
元町2丁目　TEL ㊴3151代

呉服・洋装
みよしや
神戸大丸前
電話神戸(3)三三八八～九番
大阪店阪神百貨店三階
電話大阪(361)五五四八番
姫路店やまとやしき百貨店三階
電話姫路㉓一二二一番
衣裳部 三宮町三丁目柳筋
電話③五一六五番

フランスの香りが
いっぱいのお菓子
ボン・パリー
＊500円＊
＊300円＊
アルモンド
本店 神戸市生田区元町通2の43
直売所 神戸大丸・新聞会館秀品店
本店TEL③2203

わたしは編集長 (3)

新谷秀雄
彫刻家二紀会々員

＊編集のことば＊

「わたしは編集長」をやって欲しいと依頼を受けて考えたのが、兵庫県の誇る丹波立杭窯の訪問である。とおり一遍では面白くないので私が案内役と撮影を引受けて神戸っ子の編集長に、逆に取材記者をやってもらった。

丹波立杭の市野ご一家との交際はふるく、市野利雄、弘之兄弟に、まだ父の市野石松さんも健在であった10年も昔の頃、丹波立杭焼に魅せられて、陶器で彫刻作品をつくり個展をひらこうと考え立杭窯の市野さんの家で部屋を借りて2ケ月ほど制作したことがあり、市野家とは実懇の間柄なのである。市野利雄さんは兄さんで陶芸家ではあるがむしろ協同組合の理事長をされたり経営面の方に携わっておられ、陶芸作家、市野弘之さんの陰の力となっている。市野弘之さんは、昭和33年、ベルギーのブリュッセル万国博に作品を出品グラン・プリ賞を獲得されている国際的な作家であり、昭和34年には兵庫県文化賞も受けられている。

（写真右から市野氏と新谷氏）

丹波立杭窯に市野弘之氏を訪ねて

小泉康夫 記者

5月2日、前日の雨に洗われ緑がしたたるように美しい有馬街道を、新谷編集長の運転するブルーバードがつっ走る。有馬から丹波立杭までのコースはなかなかいい道で新緑のドライブを満喫できた。

「あれ！ 確かこの道だったはずだがそれにしては良すぎるナ、間違ったかな」と三木駅近くの分れ道で車を停める。やっぱり道は間違いなかった。新谷さんはしき

りに道が良くなったと云われる。緑の小高い山を越えると丹波立杭に入いる。

立杭は、上立杭、下立杭に分かれている。東はこんもりとした虚空蔵山、西はなだらかな和田寺山がある。その山間を四斗谷川が流れ、その川の流れに沿って、上を上立杭、下流を下立杭といっている。田園には〝れんげ草〟が花をつけて美しい。清冽な山の空気が痛い程だ。もとは今田村立杭と呼ばれ、半農、半陶の村であった。

――鎌倉初期に日本に六ヶ所の陶窯がすえられた、瀬戸賞斜、志楽、伊賀、丹波、備前といづれも陶芸の源流となっている――だから丹波には鎌倉時代の作品が残っていて古丹波という素晴らしい逸品が伝えられている。その古丹波の逸品が無造作に置かれた部屋でご馳走をいただきながら話ははずんだ。その話題のなかから……

「グランプリを確得した作品は立杭焼独特のアメグリをかけた単純な火ばちなんで形には苦労しましたね。立杭窯は原始的な窯なんだけど、それだけに個性の強いものが焼上るのです。特色といえば、丹波の素朴さ、その一語に尽きると思いますね」。単純さ素朴さ、これはまた難かしいと静かに、そして力強くグランプリ作家の市野弘之さんは話される。また、「丹波の風土に陶土、薬、窯などいろいろな条件が重なって、個性が生み出され、激しい感じが陶器の肌にあらわれて来るんですよ。だから、これには丹波の伝統と精神がこもっていると言えるでしょう。古丹波の窯は無形文化財に指定されていますが、いま使っている窯もその伝統の形を継いだノボリガマ、別名、朝鮮窯ですが、これは原始的でまったく非能率的、うまく行って四割のロスが出る。だがこのノボリガマは日本には丹波だけにしかない立杭の窯なんです――この立杭窯は山の斜傾をうまく生かして造ったもので、半地上式、全長は45m、その間が9ツに仕切られている。下から火をいれ、その仕切にもそれぞれ火を入れ、一番上の〝蜂の巣〟が煙突の役目を果している――この非能率的な単純な窯から素朴な中にいいしれない気品と味わいをもったものが生れて来るのです、それが立杭焼です」

新谷さんも「私も昭和37年3月から約9ヶ月間、欧州各地を自動車旅行して思ったことはね。イタリー、フランス、スペイン、ベルギー、ドイツなどどの国も隣りあっているにもかかわらず、それぞれの国が独自のものをもっている、強い個性があるんだよ。例えば、欧州の家屋は石造りで老朽化しないし、生活の習慣というものが大切に守られています。日本人にもこの気持はほしいと思いますよ。確かに、立杭のようなこんな純粋なものは民族の誇りとしても、残すべきですよ。この立杭焼はまた実際にやると楽しみでね。私も10年程前にやりましたけれど雰囲気がいいんだ、出来上った時のよろこびはもう、何んとも云えませんネ。窯に火がはいっているときは物凄いんだけどナ」。

立杭焼を物色する小泉記者

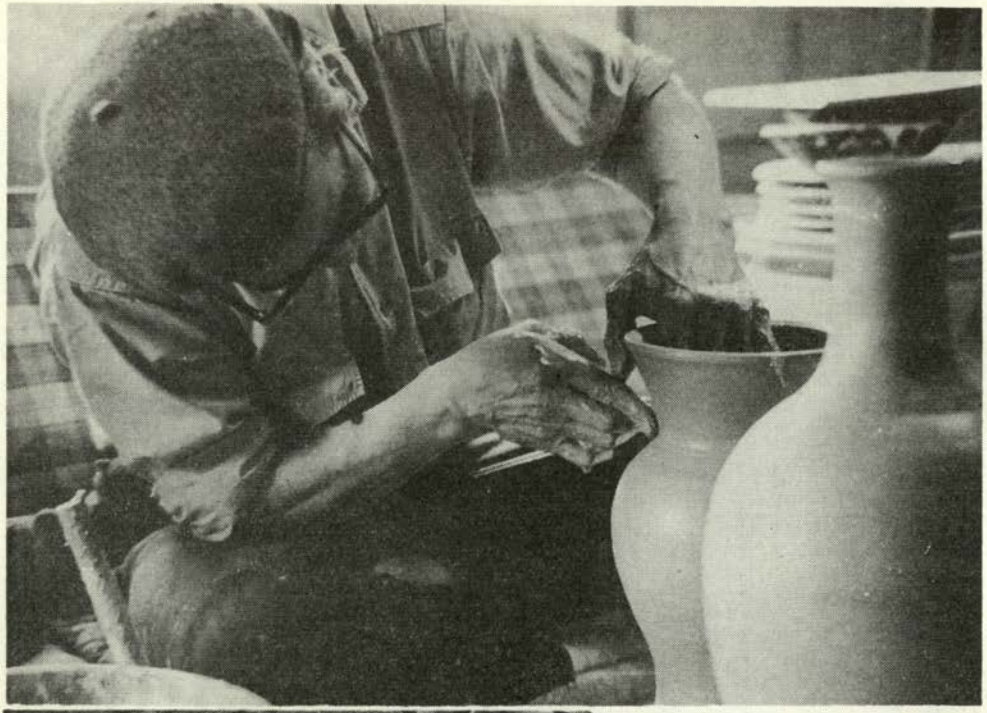
立杭の火のうなりを市野さんが話す。

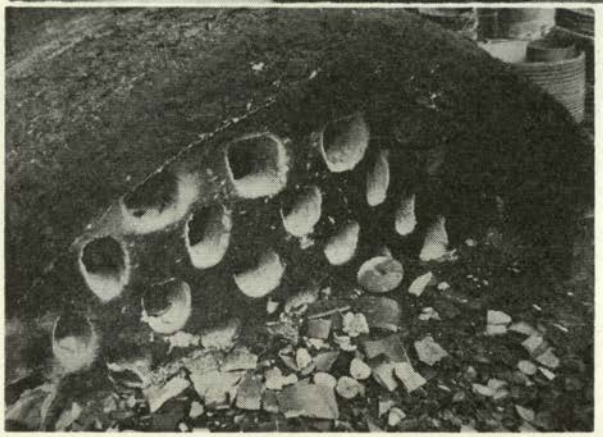
「実際、火がはいると窯のなかは火の洪水です。炎の走る音がゴウゴウと鳴るんです。普通の陶器は、千二百七十度から千三百十度でやるんですが、立杭では、千三百五十度まで上げるんです。ここまで上げないと、こげ茶色にならないのです。生地の鉄分とくすりの鉄分がうまくかみ合わないのでしょう。火は、60時間から70時間たき続ける訳で、その間は休むことは許されません。炎の色、作品の色で焼きを加減するのですよ。勘で判別

して行く訳です。冬は空気が乾燥していて窯をたく条件がいいんだけど、つらいですよ。だけど白い雪のなかを赤い炎を吹き上げる窯は美しいですね。いづれにしても窯にはいってしまえばもう祈るような気持です」

窯の話題はいっかなつきようとしない。五月の陽もようやく丹波の山かげに落ちはじめる頃、私たちはこの立杭の里に別れをつげ、ふたたび、新谷さんの運転するブルーバードに乗って、帰途についた。

★





写真上

よくねり上げられた陶土がろくろにすえられ、市野さんの手にかかると、そこに立杭焼独特の素朴なカタチが生れる。市野さんの指先からそれが力強く生れる。

写真下

素焼された陶器は薬をかけられそして立杭窯に入れられる。窯の尖端は蜂の巣のように穴があいていて、この穴から火が束になって吹き出される。